昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和7年12月1日発行 第49巻第12号通巻第579号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

月刊みんぱく

12月号
2025

特集 笑（ワラ）ハラ

巻頭エッセイ 藤田 一照

思わず漏れる謎の笑い

藤田一照（ふじたいっしょう）
曹洞宗僧侶

この四月から毎月一回、気功を習っている。師匠は筑波大学で長く体育を教えておられたE先生だ。毎回始めに、身体各部の関節をじっくりほぐしてから、静かに坐る瞑想を行なう。その後、二人で向かい合って両手を合わせ、お互いに押し合うというシンプルな稽古をしている。

始めたばかりのころの私は、筋力に頼って力まかせにとにかく相手を押そうとしていた。腕に力を込め、足で床を精一杯踏んで前に出ようとするのだが、七八歳になるE先生はびくとも動かない。「そういう自分本位な力の使い方では、私に力が伝わってこないです。」と言われた。役割を交代して、今度は先生が私を押すと、なぜか力が出せないまま、私はズルズルと後ろに押されていく。先生はそれほど力を出しているようには見えないのだが、どうにも抵抗できないのである。「あれ～？　不思議だな～」と思わず笑いが漏れる。

大昔、合気道を習っていたころ、達人として高名なある先生の片腕を両手でガシッと握ったら、いきなりフワッと投げ飛ばされたことがある。抵抗する間もなく私の身体は空中を舞っていた。しかも、なんだか爽やかな心地よさがあって、そのときも思わず笑いが漏れた。

後ろに押されたり投げ飛ばされるというのは、勝負としては負けなのだから不愉快なことであり、不快な体験であるはずだ。負けず嫌いの私なら尚更だ。武術の技が見事にかかったとき、勝って笑うのならわかるが、かけられた側がしばしば笑ってしまうのはどうしてなのだろう？

当人の感じとしては、負けた照れ隠しに笑っているのではないし、かといって漫才を見ておかしいからゲラゲラ笑うのとも違っている。笑うつもりは少しもないのに、思わず身体から漏れ出てくるような笑いなのである。こちらの予想していたこととはまったく違う、思いがけない体験を身体が愉快と感じて喜んでいる生理的な反応なのかもしれない。

そういう笑いが漏れるときに共通しているのは、二人の間にあるはずの「ぶつかり合い」がないことだ。緊張や力み、対立の代わりに、軽やかさや流れ、交流がある。それに誘われるようにして、意識とは別に身体が勝手に反応してしまうのだ。

呼吸を司る横隔膜はドーム形をしているが、そこから腰椎まで伸びている細長い部分は脚と呼ばれている。技をかけられたとき、どうやらその辺りがふっと緩む感じがすることが最近わかってきた。その脚の緩みがアハハと笑うきっかけになるのかもしれない。

いつか私が押したとき、先生に笑いが生まれる日が来ることを夢見て稽古している。ちなみにE先生は自分の気功を「円笑気功」と名づけている。

プロフィール
1954年愛媛県生まれ。東京大学を経て、東京大学大学院博士課程を中途退学し、1982年曹洞宗の禅道場安泰寺に入山、翌年に曹洞宗僧侶となる。1987年よりマサチューセッツ州西部にある禅堂に住持として渡米、禅の講義や坐禅指導をおこなう。2005年に帰国。神奈川県葉山町にて慣例にとらわれない独自の坐禅会を主宰している。Facebook上で松籟学舎一照塾を主宰。著書『ブッダが教える愉快な生き方』（NHK出版）、共著『アップデートする仏教』（幻冬舎新書）など多数。

月刊みんぱく
2025年12月号

表紙
マダガスカル固有のキツネザル、ベローシファカの「遊びの顔」。笑ってる？　笑わせてる？
（マダガスカル ベレンティ保護区、2005年、栗林愛撮影）

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1　巻頭エッセイ
思わず漏れる謎の笑い
藤田 一照

特集 笑ハラ

2　**笑いコミュニケーション**
樫永 真佐夫

3　**笑うキツネザル**
市野 進一郎

4　**唸って笑って怒って笑う**
松本 雄一

6　**「笑え」が神の思し召し**
鈴木 昂太

8　**「微笑みの国」では笑っておこう**
津村 文彦

9　**笑害者になろう**
広瀬 浩二郎

10　**😀 (^O^) “音と声”が与えられたとせよ**
古賀 弘幸

12　みんぱく回覧板

14　推しコレ図鑑
嫁入り道具におまる？
韓 敏

16　もっと、みんぱく
イタリアの町では、パン屋に行こう！
宇田川 妙子

17　世界の「乗っちゃえ！」
パコパンパ遺跡まで、残り40キロ
荘司 一歩

18　だって調査だもの
腸チフスとマラリアと過ごした年末年始
池邉 智基

20　ぱくっ！とフィルめし
「食事は1日1回、夜だけだね」
風戸 真理

21　今月号の地図・編集後記

特集 笑ハラ（ワラ）

「笑え！」 喜べって言われても……
「笑うな！」 面白がるなと言われても……
笑いは安心と不安をかきたてる。
そのくせ、他人にばかりでなく、動物やモノ・記号にまで
笑いを求めるのがヒトの性（さが）。
もちろん、笑ハラも発生！

笑いコミュニケーション

樫永（かしなが）真佐夫（まさお）　民博 教授

ヒトは、楽しさ、媚（こ）び、諦め、恥じらいその他、あらゆる感情表現のために笑いを高度に発達させてきた。視覚的認知の比重が大きいヒトにとって、笑いはまずもって笑顔という視覚情報で示されることが多いが、笑いの表現形態は文化によって異なっている。儀礼や芸能などにおける笑いの発声、その所作も、それぞれの文化ごとに様式化されている。一方、芸能で仮面が用いられる場合、仮面自体の表情が微笑（ほほえ）みに見えることが多いのは、定まった声や所作さえ付加すれば、隠れたあらゆる感情を表現し易いからだろうか。

コミュニケーションの手段が多様化し、文字や図像操作の技術の発達も著しい現代、デジタル上で笑いや笑顔の表現は多様を極めている。SNSでのやりとりなどで、区切りや末尾にしばしば登場する絵文字のなかでも、とりわけ笑顔絵文字は種類が多い。文末に「(笑)」など付すのは、すでに旧習。笑顔絵文字はますます増殖し、わたしみたいなアナログ志向の人間に「ちゃんと笑顔絵文字を使いこなしてくれ」なんて言われても……。「そんなの笑ハラだ！」と、こちらが訴えたい。

そうだ、笑いをめぐるハラスメントだっていくらでもあるではないか。訴えてやる！　バリエーション豊富な笑ハラの観点から、笑いの表現世界を逍遥（しょうよう）してみよう。

上：ルーイ県のピーターコーン祭りでは精霊も笑う（タイ ルーイ、2025年、津村文彦撮影）

笑うキツネザル

市野（いちの）進一郎（しんいちろう）　民博 特任助教

キツネザルは笑わないのだろうか？　わたしはマダガスカルでワオキツネザルの社会生態の研究をしていて、今までに何百枚もキツネザルの顔写真を撮影し、それらを眺めてきた。この研究ではキツネザルを一頭ずつ識別し、それを継続していくために顔写真を撮ることが重要だ。そんなわたしでも、笑顔のワオキツネザルを見た記憶がない。キツネザルの顔は、良くいえばぬいぐるみのようで、悪くいえば無表情だ。それは表情をつくる筋肉が発達していないからだといわれている。

ただし、笑っていると思われる表情が唯一ある。それは、若いキツネザルたちがレスリングのような遊びをしているときに見せる表情だ。キツネザルに限らず、多くの動物は社会的な遊びの場面で「遊びの顔」とよばれる、笑うような顔をする。さらに、ある研究者によると、笑い声に相当する音声はヒトに近いサルの仲間だけではなく、それ以外の哺乳類や一部の鳥にまでみられるらしい。

さて、表情が乏しいキツネザルは本当に笑っているのだろうか。わずかに口を開けたその顔は少し怖くて、笑顔とは断定できない。しかし、笑いは表情だけで判断されるものではない。その表情が笑いの感情表現に対応していることが重要なのだ。ただし、ヒトは共感する動物であることも忘れてはいけない。わたしたちがキツネザルの遊びを見て彼らが笑っていると思うとき、その微笑（ほほえ）ましい光景にわたしたちの心が笑っているだけかもしれない。キツネザルは本当に笑っているのだろうか。

ワオキツネザルの年長者との遊び。大人が遊びに参加することは少ないが、オスは子どもたちと遊ぶことがある

赤ん坊の遊び。生後2〜3カ月で母親から離れて動くようになると、遊びがみられる

子どもどうしはよく遊ぶ。口を少し開けた「遊びの顔」がみられる（写真はすべてマダガスカル ベレンティ保護区、2005年、栗林愛撮影）

唸って笑って怒って笑う

松本 雄一
民博 准教授

古代アンデスの「微笑む神」

さて、この写真を見てほしい（図1）。アンデス文明の形成過程において重要な役割を果たした大神殿チャビン・デ・ワンタル遺跡、その内部に鎮座するランソン像とよばれる石彫である。もともとの石材の形を生かして彫り込まれたその図像は、同神殿における主神のひとつと目されている。メインとして表現されているのは、巨大な牙をもつネコ科動物の表象であるが、胴体は人間でその末端にはヘビやコウモリなどが複雑に絡み合っている。薄暗い回廊のなかに浮かび上がる巨大な超自然的存在の石彫は、さぞかし訪れる人びとを畏怖させたことであろう。しかしこの神様、じつは「微笑む神（smiling god）」ともよばれているのだ。

突然個人的な話になるが、わたしはどうも口角を上げて笑うことができないらしい。子どものころからそうだった。だからテレビに映る人びとがきれいに口角を上げて笑っているのをいつも感嘆のまなざしで見ている。そんなわたしにとって、「口角を上げる」ということは、「笑顔」のもっとも重要な要素であるといってよい。だからこの「微笑む神」に関しても納得はした。ちょっと怖いけど、遠くから来た参拝者を笑顔で迎えるなんて素敵じゃないか。

口角は上がっているが……

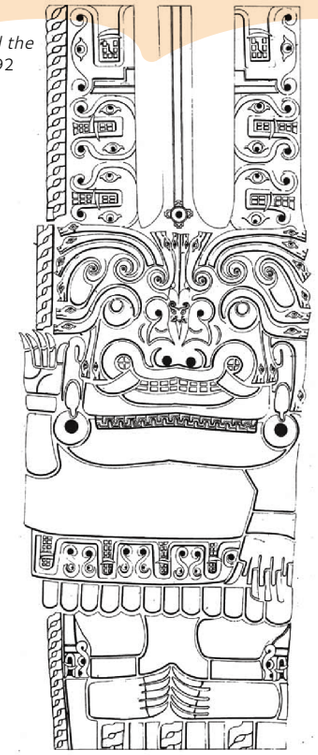
チャビン・デ・ワンタル遺跡にはランソン像のほかにも有名な石彫が数多く存在するが、そのなかに「メドゥーサ」とよばれるものがある（図2）。神殿の壁を飾っていた石板に施された彫刻で、その名のとおり髪の毛がヘビで表現された神格である。ランソン像と同様の巨大な牙をもつネコ科動物の神格であり、口角が上がっているのだが、じつはこれは笑っていないらしい。鼻の部分に皺が表現されているのだが、これは皺を寄せて唸っていることの表現だというのだ。たしかに動物が唸るときは皺が寄って口角が上がる。え、まてよ、じゃあランソン像も笑ってなかったの？　鼻の上の線は皺？　やっぱり怖がらせてたの？

こんな筆者の惑いをあざ笑うかのように脳裏に浮かぶのは、神殿におけるもうひとつの主神とされる「杖を持つ神」の石彫であった（図3）。複雑極まりない姿を見せるこの神様も、メインとなるのは牙をむいたネコ科動物である。でもこの神様の場合は明確に口角が下がっている。額には皺が寄っており、不機嫌な表情であることがまことにわかりやすい。しかしこの神様、図像の上下をひっくり返すとにやけているとしか思えない笑顔があらわれるのだ（図4）。そして、怒りの証拠だった額の皺がまた別の「口角が上がった顔」の鼻の一部であることがわかる。あれ、こっちの顔は笑っているの？　唸っているの？

これはもうダメだ。そもそも筆者がこれまでの人生から理解した「笑顔」で認識できるようなものではないのかもしれない。

古代アンデスの世界では神々は唸りながら笑い、怒りと笑いが共存し、ときに反転するのだろう。筆者もまた、そんな世界を解明しようとする考古学者の端くれではあるが、底の浅い解釈をするヤツだとどこかで「笑われて」いるのかもしれない。

出典：Burger, Richard L. *Chavin and the Origins of Andean Civilization*. 1992



ランソン像の展開図

図1　チャビン・デ・ワンタル遺跡、神殿建築の内部に位置するランソン像（ペルー アンカシュ州、2017年、ジェイソン・ネスビット撮影）

図2　「メドゥーサ」の石彫（ペルー アンカシュ州、2009年、国立チャビン博物館蔵、関雄二撮影）

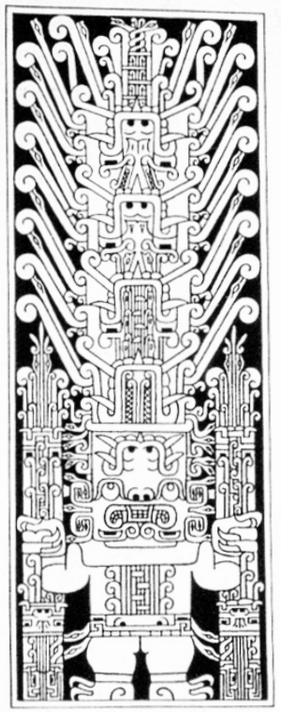


図3　チャビン・デ・ワンタル遺跡「杖を持つ神」の図像
出典：Burger, Richard L. *Chavin and the Origins of Andean Civilization*. 1992

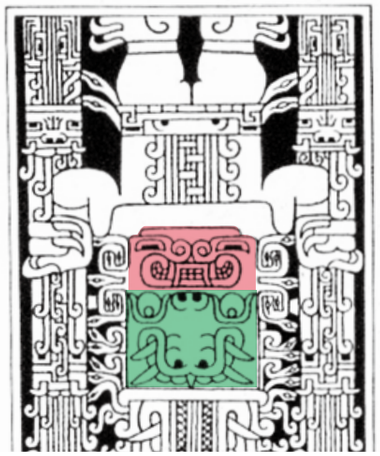


図4　「杖を持つ神」をひっくり返したときにあらわれるふたつの顔（赤：にやけたような笑顔？／緑：口角を上げた笑顔？　唸り顔？）

「笑え」が神の思し召し

鈴木 昂太
民博 准教授

「笑え、笑え」と強いる鈴振と升持（和歌山県 日高川町、2025年）

笑いと儀礼が出会うとき

笑い×祭り。読者の皆さんは、この二つのかけ合わせからどのような光景を思い浮かべるだろうか？

笑うことを中心におく「笑い祭り」は、熱田神宮（愛知県名古屋市）の「笑酔人神事」、山口県防府市の「笑い講」など、全国各地でおこなわれている。そこには、笑顔あふれる多幸感に包まれた雰囲気がある一方で、威儀を正した装いで参列する神事としての厳粛さもある。笑い祭りは、〝笑い〟というポジティブな志向性と〝儀礼〟という伝統を踏襲するコンサバティブな志向性、二つの相反する性格をもつ祭りだといえる。

和歌山県日高川町、笑いを奉納する祭り

こうした笑い祭りの性格を理解するために、和歌山県日高川町の丹生祭（笑い祭）を紹介したい。これは、大字江川の鎮守である丹生神社の秋祭りで、一〇月のスポーツの日前の日曜日に開催される。氏子である和佐・江川・山野・松瀬の四集落が、それぞれ別個に芸能や山車を奉納する複合的な祭りである。このうち和佐地区が「笑い祭」を奉納している。

笑い祭は、神輿行列に供奉する鈴振一名と升持一二名（閏年には一三名）により、御旅所から神社へと戻る道中で演じられる。裃・袴・草履姿の升持は、新穀の稲穂を結び付けた御幣と竹串に挿した野菜や果物を立てた一升枡をもつ。これらの青果は、もらうと縁起が良いということで、ねだりにくる観客が来る度に配りながら歩いていく。顔を白く塗り色鮮やかな衣装を着た鈴振（先達ともよばれる）は、升持と神輿を先導する役目を果たす。

鈴振が要所要所で「エエ楽じゃ、世は楽じゃ、笑え、笑え」と大声で叫ぶと、升持は「ワッハッハ」と大笑いながら升を頭上に捧げ上げる。これを三回ずつ繰り返し、観客を笑わせる。そして、鈴振は手持ちの箱から飴やクッキーなどお菓子を撒く。そうすると子どもが集まり、それを見ている大人にも自然と笑いが生まれる。こうして笑いの連鎖を各所に引き起こしながら、神社へと神輿は戻っていく。

「丹生神社笑祭の図」『紀伊国名所図会』後編（五之巻）出典：国立国会図書館デジタルコレクション

白塗りした道化の誕生

笑いにあふれた福々しい光景を作り出すうえで、鈴振の滑稽な所作は重要な役割を果たしている。だがじつは、鈴振は先の大戦後になってから生まれたものである。嘉永四（一八五一）年に刊行された『紀伊国名所図会』後編五之巻には「丹生神社笑い祭の図」が載せられている。これを見ると鈴振はおらず、現在の升持に当たる村老が一升枡を捧げ持ち、「笑え、笑え」と発声していた。かつては道化的な存在がおらず、正装した村老が笑いを強制していたのである。

どうしてこうした変化が起きたのだろうか。住民の意識変化、メディアの影響など、さまざまな理由が想定される。そのうえで、「笑ハラ」の観点から、笑い祭を「笑い」を強制する神のハラスメントであるととらえてみよう。かつてはほぼ強制で笑わせていたのに、わかりやすく滑稽なものに変わっていったのである。現代に近づくことで、カミも優しくなったのかもしれない。

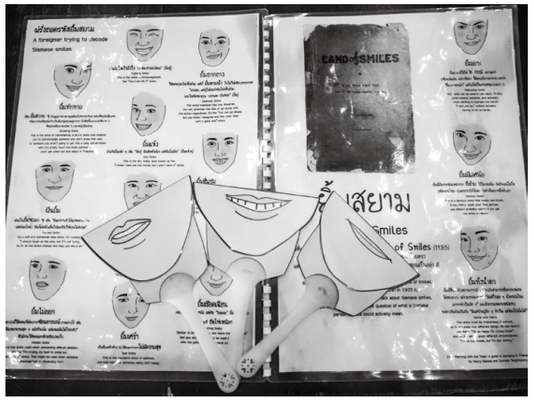
上：升持が捧げ上げる一升枡
左：巨大な旗を勢いよく上げる幡指（はたさし）の行事
（どちらも和歌山県 日高川町、2025年）

お菓子を撒く鈴振（和歌山県 日高川町、2025年）

「微笑みの国」では笑っておこう

津村文彦　名城大学 教授

「笑って！」なんていわれなくてもあふれる笑顔（タイ コーンケン、2003年）



サイアム博物館での微笑みの展示（タイ バンコク、2025年）

「笑うのが上手ですね（イム・ゲン）」初めて訪れた村でニコニコしているだけで褒められた。「前に来た日本人は笑ったことがなかったよ」マジメすぎると評価を落とすようだ。「綺麗に笑って！（イム・スワイ・スワイ）」もよく耳にする。写真を撮るときや機嫌が悪いときなど、親が子どもに、また恋人同士で、微笑みをよびかけることばだ。作り笑いも「綺麗に」することが求められる。

イムは微笑みから笑いまで含まれる。

ホームズとタントンタウィーの著書『タイ人と働く――ヒエラルキー的社会と気配りの世界』（めこん、二〇〇〇年）によると、一三種の微笑みがあるらしい。イム・タンナムター（幸せすぎて涙が出るほどの微笑み）、イム・サオ（悲しみをあらわす微笑み）、イム・ミーレッサナイ（悪意を隠す微笑み）など、いずれも複雑な感情表現である。バンコクのサイアム博物館では、「微笑みマスク」を使って展示しているが、微笑み素人にはなかなか見分けがつかない。

「微笑みの国タイ」というフレーズにも要注意だ。これは一九六〇年代に国際観光の振興のため採用されたスローガンである。現在も、タイを訪れた旅行者はホテルやレストランでホスピタリティにあふれる微笑みに迎えられる。だがタイ語で「イム・サイアム（シャムの微笑み）」とよばれるように、これは外国人向けのきわめて形式的な微笑みである。

タイ人は「笑わない顔は怖い」という。何を考えているかわからないからだそうだ。多様な微笑みには喜怒哀楽の感情がずばり表現されている。タイの微笑みの修得は容易ではない。とにかく、まずは笑っておこう（イム・ワイ・ゴーン）。

還暦祝いのプレゼントに満面の笑みを浮かべるソムピットおばさん（タイ コーンケン、2016年）

特集 笑（ワラ）ハラ

笑害者になろう

広瀬浩二郎　民博 教授

近年、障害者に対する「合理的配慮」が各方面で検討・実施されている。しかし、じつは僕たち障害者も健常者に「合理的配慮」を提供していると感じる。例えば職場の会議、友人との宴会などは基本的に視覚を使えることが前提で進められる。「こちらを見てください」「このような動きになります」。見様見真似ができない視覚障害者にとって、こそあどことばは天敵である。マジョリティの基準、ペースで会議・宴会が進行しているとき、マイノリティはどこまで自己主張すべきなのか。「すみません、ちょっと待って」「よくわからないのですが」。こんな発言が会合の楽しさ、全体の雰囲気を損なうケースは少なくない。僕は迷いつつも、曖昧な微笑（ほほえ）みを浮かべ、わかったふり、見えているふりをすることがある。これは、障害者が我慢を強いられるという消極的な現象ではなく、「和」を重んじる積極的な配慮のひとつだと位置付けると、気が楽になる。

以前、公的文書等での「障害」の表記が話題になったことがある。自分たちは「害」ではないので、「がい」と表記すべきだと主張する当事者も多かった。そもそも、「障害／障がい」は耳で聞くだけでは区別できない。また、表音文字の点字で書けば、両者は同じである。僕自身は、「障害」を創り出すのは社会であり、社会の責任において「害」を取り除くことができると考えるので、「障害」という表記を使い続けている。自分たちは「害」ではないと訴える当事者に対しては、マジョリティ（健常者）が一方的にマイノリティに貼り付けたレッテルである「害」を笑い飛ばす「笑害者（しょうがいしゃ）」になろうとよびかけたい。

と、勇ましいことを書いている僕だが、視覚に依存するマジョリティのなかで暮らしてみると、苦笑せざるを得ない場面に頻繁に出合う。小学生時代、弱視だった僕は「おまえは先生の顔が見えないから、こちらが怒っているのに、いつまでもふざけたことを言うのだ」と、よく注意された。客観的に振り返ると、「いつまでもふざけている」のは視覚障害とは関係なく、僕の性格の問題だと思う。一方で、「表情が見えない＝相手の気持ちがわからない」というある種の思い込みは、今でも僕の内面に残っているような気がする。

二十代～三十代のころ、米国留学を通じて、さまざまな外見の人びとと交流したおかげで、僕は「表情が見えない」弱みから、「表情を見ない」強みを少しずつ意識するようになった。昨今、障害のある芸人の活躍が増えている。障害者が「笑われる」存在から「笑わせる」存在へ移行するのは、社会の成熟として評価できる。笑いの本質は視点をずらすこと。独自の視点をもつ、いや元来、視点にとらわれない全盲者は、「見せずに魅せる」新たな笑いの創造者になれる資質を有しているといえよう。

😀 (^O^)

〝音と声〟が与えられたとせよ

古賀 弘幸　國學院大學 講師

……とのみの糞のやうな

一九世紀末のタイプライターの文書にその原型があるという顔文字にしろ、一九九九年にNTTドコモのiモードに搭載された絵文字にしろ、その広がりのきっかけは機械文字の入力機器の一般化にあった。

顔文字がemoticonとよばれることでもわかるように、顔文字や絵文字は単位化・均質化・機械化された文字列に対して、笑いや情動、それらの「声」を付加する工夫であった。いってみれば対面のコミュニケーションの場面では欠かせない領域を、機械化された記号・符号を用いて事後的に回復しようとする試みである。

そのような意味では、顔文字は近代になって言文一致運動と並行して日本語表記に急速に普及した句読点の働きとも似ている。日本語に本格的に導入された記号・符号には句読点のほか、「……」「?」「!」などがあったが、尾崎紅葉は「……」について「言懸・言遺・節略（云々）・思入（余情）」を表現すると記しながら、「文字の間に……とのみの糞のやうなもなアありゃア一体何だ」（「文盲手引草」）と皮肉っている。もちろん紅葉自身が小説でこうした符号を多用していたのだから、これは自己パロディである。

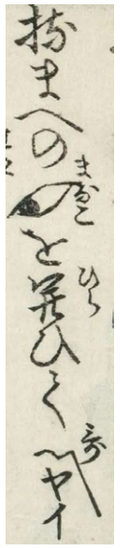
（卯平さん人がわりいよ……老爺）
其赤にあつて怒れば、老爺懲ずにまた高笑ひ、お政は、
あれほど呼びしものをしらぬ顔の女の心意氣が惡く、と
の返報と、わざと急きこみし調子にて
（それッ、それッ、お嬢様蛇が……）
（きやッ）

尾崎紅葉『初時雨』より。
この時期、会話文の「」は()が使われることも多かった（明治22[1889]年）
出典：国立国会図書館デジタルコレクション

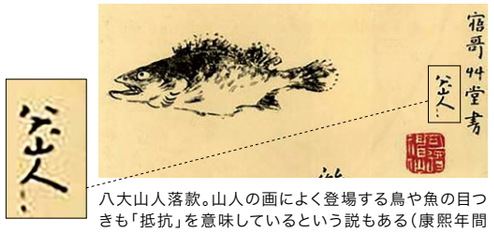
「哭」くのか、「笑」うのか？

絵と文を往還するような文字遊びは日本では平安の「葦手」に始まり、近世以降、枚挙にいとまがないし、手塚治虫の「漫符」など、漫画の影響も無視することはできない。ここでは「絵」を「文」の要素として使っているものを考えよう。

音と声をもたない視覚的な記号・符号をテキストとともに使う試みは、活版印刷以前にもさまざまに存在していた。



中村芝翫『道中芝翫栗毛』2巻下より。
「持まへのまなこを開ひてヘヤイ…」。歌舞伎の見得を強調する意味で使われたものか（文化11[1814]年）
出典：国立国会図書館デジタルコレクション



八大山人落款。山人の画によく登場する鳥や魚の目つきも「抵抗」を意味しているという説もある（康熙年間[1662〜1722年]）出典：Wikimedia Commons

明日研究室に来てください。
確認したいことがあります。
午前 10:58

マルハラ？

類似の例をあまり見ないが、『道中芝翫栗毛』の「まなこ」はこうした使い方の早い例だろう。一方で山東京伝による判じ物の引札は、絵が「文」を成しており、絵を同音異義語として読み、統辞的にことばにできなければ読み解くことができない。

一方で文字の書きぶりや筆致などによって文字を別様に読んで複数の意味をもたせることも、漢字にはある。中国・戦国時代からあるという坼字とよばれる方法は、漢字を部品に分解・再構成して、遊戯的な詩や占いなどに使われた。

明末清初の明王朝の遺民であった文人八大山人は、坼字的な方法でそんな落款を記している。明末清初には明王室の血族などが、満州人による清王朝の支配を受け入れることをよしとせず、さまざまな隠微な方法で抵抗の意思を表明した。極端に字間を詰めた「八大山人」の落款は、一字の単位があいまいになってしまい、「哭之（これを哭く）」とも「笑之（これを笑う）」とも読める。つまり、「明朝の滅亡を悲しむ」「清朝を嘲笑する」である。文字遊びは、政治的な行為でもあった。

「。」は怒ってる？

少し前に話題になった「マルハラ」は、顔文字ですらないが、メールの文末が句点で終わっていることを「怒られてるみたい。これはいやがらせではないか」と訴えている。文字の運用にかかわる符号の使い方までもが、言語行為的に働くこともあるということだろう。しかしこれは、「正しい」と漫然と考えられている符号の運用をあざ笑う、記号体系への（逆）ハラスメントなのだ。「美しく正しい文字」の規範をからかった、かつての変体少女文字のように。

山東京伝による「新形紙烟草入」の引札より。
錠と香の絵のあいだに返り点を打って「口上」と読ませている（天明年間[1781〜89年]、行間の解読は幸田露伴「京伝の広告」による）
出典：国立国会図書館デジタルコレクション

みんぱく回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

特別展

舟と人類
――アジア・オセアニアの海の暮らし

会期　12月9日(火)まで
会場　特別展示館

家船(レバ)の展示

企画展

フォルモサ∞アート
――台湾の原住民藝術の現在(いま)

会期　12月16日(火)まで
会場　本館企画展示場

パタダ・アルツァン
《歳月》2024年

みんぱく映画会

【館外開催】

みんぱく映像民族誌シアター

本館制作オリジナルDVD「みんぱく映像民族誌」シリーズから、3つの収録作品を上映し、監修者によるトークをおこないます。

会場　第七藝術劇場・シアターセブン(大阪・十三)
司会　黒田賢治(本館 准教授)
※館外での開催です。
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料

「奄美大島の八月踊り」

奄美大島の八月踊り

日時　2026年1月24日(土)14時～16時30分(13時30分開場)
定員　90名
解説　笹原亮二(本館 名誉教授)

【申込期間】
▼友の会先行受付
12月15日(月)～19日(金)定員20名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

▼一般受付　12月22日(月)～2026年1月21日(水)

「ジャワの影絵芝居、海を渡る」

ジャワの影絵芝居、海を渡る

日時　2026年1月31日(土)14時～16時30分(13時30分開場)
定員　55名
解説　福岡正太(本館 教授)

【申込期間】
▼友の会先行受付
12月15日(月)～19日(金)定員10名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

▼一般受付　12月22日(月)～2026年1月28日(水)

「ラージャスターンのガンゴール祭礼」

ラージャスターンのガンゴール祭礼

日時　2026年2月8日(日)14時30分～16時30分(14時開場)
定員　90名
解説　三尾稔(本館 教授)

【申込期間】
▼友の会先行受付
12月22日(月)～26日(金)定員20名

お申し込み先
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

▼一般受付　2026年1月5日(月)～2月4日(水)

ワークショップ

年末年始イベント

あら馬、みんぱくにもウマがいた！

展示場にある、2026年干支の午(馬)にまつわる資料を載せたマップを片手に、展示場を巡ってみませんか？　アンケートにご協力いただいた方にはオリジナル缶バッジを差し上げます(各日先着150名)。

日時　12月21日(日)、2026年1月10日(土)、11日(日)10時～16時30分(15時30分受付終了、配布予定数がなくなり次第終了)
会場　本館1階エントランスホール
受付　本館展示場
※当日随時受付、要展示観覧券(イベント参加費は不要)

みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

点字体験ワークショップ

日時　12月13日(土)、2026年1月10日(土)12時～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

干支の動物で絵馬をつくろう

日時　2026年1月12日(月・祝)10時30分～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

「西アフリカのお話し会」の公演

日時　2026年1月12日(月・祝)
①11時30分～12時　②13時30分～14時
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

ポストカードをつくろう！
～みんぱくでさがす新年のラッキーシンボル～

日時　2026年1月18日(日)10時30分～15時30分(最終受付15時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

お正月や干支のお話を楽しもう

新年や干支にまつわる絵本の読み聞かせです。

日時　2026年1月18日(日)
①11時30分～11時50分　②13時～13時20分　③14時～14時20分　④15時～15時20分
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

人間文化研究機構プロジェクト関連 X-DiPLASシンポジウム

生成AI時代のデジタルアーカイブ――「民博・学術知デジタルライブラリ(X-DiPLAS)」をバージョンアップする

日時　12月21日(日)13時～17時(12時30分開場)
会場　本館2階第4セミナー室
定員　50名
趣旨説明　小林直明(本館 プロジェクト研究員)
研究発表　渡邉英徳(東京大学 教授)、常石史子(獨協大学 准教授)、数藤雅彦(五常総合法律事務所 弁護士)、大井将生(同志社大学 准教授)

国立民族学博物館 広報係
電話　06-6878-8560(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form/

パネルディスカッション
[モデレーター]原田健一(新潟大学フェロー、X-DiPLASプラットフォーム委員)
[パネリスト]渡邉英徳、常石史子、数藤雅彦、大井将生、小林直明

主催　人間文化研究機構 共創先導プロジェクト(共創促進研究)「学術知デジタルライブラリの構築」国立民族学博物館拠点(X-DiPLAS)

【申込期間】　12月14日(日)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員250名)。
※詳細は二次元コード(QR)からご確認ください。

お問い合わせ先
本館研究協力課 共同利用係
kikourenkei@minpaku.ac.jp

遺贈寄付のお知らせ

みんぱくではREADYFOR(レディーフォー)株式会社と連携し、遺贈によるご寄付や相続財産のご寄付に関するご相談を承っています。お気軽にご連絡ください。

お問い合わせ先
レディーフォー遺贈寄付サポート窓口
【電話番号】0120-948-313(平日10時～17時「年末年始除く」)
【オンライン】二次元コード(QR)からご連絡ください。

休館日のお知らせ

年末年始は12月28日(日)から2026年1月4日(日)まで休館します。年始は1月5日(月)から開館します。

みんぱくゼミナール

会場　①本館2階第5セミナー室ほか
　　②オンライン(ライブ配信)
参加無料
　①会場参加は申込不要(定員200名)
　※メイン会場(85名)が満席の場合は中継会場をご案内します(115名)
　②オンラインは事前申込制(定員なし)

第563回
12月20日(土)13時30分～15時(開場13時)
砂澤ビッキの思想
講師　マーク・ウィンチェスター(本館 助教)

第564回
2026年1月17日(土)13時30分～15時(開場13時)
ひとつの家門、みっつの顔
――ある「ソウル両班」の20世紀
講師　太田心平(本館 准教授)

ある「ソウル両班」家門の祭事(2009年)

本の紹介

広瀬浩二郎 著
『ユニバーサル・ミュージアムから人類の未来へ――「目に見えないもの」の精神史』
雄山閣　2,860円(税込)

本書には、ユニバーサル・ミュージアム研究の第一人者である著者の「世界をみる」多様な手法が紹介されています。盲目の旅芸人・瞽女の活動から「ユニバーサル」の真意を導き出す独自の解釈は、本書最大の特徴です。
視覚優位の現代社会の中で、触覚が果たす役割とは何か。点字考案200周年を記念して、触覚文字である点字の意義・特徴をわかりやすく解説し、「触文化」の普遍的な価値を宣揚する一冊です。

小茄子川歩、関雄二 編著
『考古学の黎明――最新研究で解き明かす人類史』
光文社　1,430円(税込)

狩猟採集生活→農耕革命→生産増→人口増→貧富の差→都市→国家という、我々の多くが信じてきた「進歩史観」は正しいのか？　人類学者デヴィッド・グレーバーと考古学者デヴィッド・ウェングロウの共著『万物の黎明』は、この進歩史観をくつがえし、世界中に衝撃を与えました。本書は『万物の黎明』に大なり小なり衝撃を受けた日本の考古学者が集い、自らの最新研究を基に、人類史のパラダイムシフトをおこなう試みです。

友の会
講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話　06-6877-8893(9時～17時、土日祝を除く)　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第567回　12月6日(土)13時30分～15時
2034年に向けて
――アイヌ民族綜合調査の研究
講師　伊藤敦規(本館 准教授)
会場　本館2階第5セミナー室(定員70名)

第568回　2026年1月10日(土)13時30分～15時
火山灰から読み解く景観
――古代メソアメリカ文明を事例として
講師　市川彰(本館 准教授)
会場　本館2階第5セミナー室(定員70名)

日本をはじめとする火山国では、噴火によって降り積もった火山灰が、景観や人びとの暮らしにさまざまな影響を及ぼしてきました。本講演では、中米エルサルバドルで紀元後400～1000年頃に発生した複数の噴火を事例に、火山灰が古代メソアメリカの人びとの生活や技術にもたらした変化、そして景観との複雑な関わりについてご紹介します。

会員交流のための企画
中牧理事長のオンラインサロン

日時　2026年1月11日(日)13時30分～15時
中牧理事長を囲んで、おしゃべりを楽しみませんか？　今回は『月刊みんぱく』編集長の樫永真佐夫先生をゲストに迎えてお送りします。
【申込期間】　12月26日(金)まで

第90回 体験セミナー

手のなかの益子、まなざしのなかの民藝
――「MINGEI」のかたち、その現在(いま)
日程　2026年1月17日(土)～18日(日)
【申込期間】　12月12日(金)まで

推しコレ図鑑

嫁入り道具におまる？

韓 敏（ハン ミン）　民博 教授

縁起物の子孫桶

子孫桶（ズースントン）は、馬桶（マートン）ともよばれ、水洗トイレが普及する以前にはおまるとして使用されていた。一方で、結婚の際には「子孫桶」として嫁入り道具に用いられ、新婚夫婦の幸福や子孫繁栄を象徴する縁起物として特別な文化的意味をもっていた。おまるが嫁入り道具として重視された背景には、坐分娩（ざぶんべん）――おまるに座った姿勢で出産するという伝統的な方法との関係があり、花嫁の生殖能力を象徴するものと信じられてきた。

この子孫桶は、上海市奉賢区西渡鎮（しゃんはい し ぼうけん く せい と ちん）に住む82歳の男性とその妻から収集したもので、男性の祖母が結婚の際に持参した嫁入り道具のひとつである。その後も、男性の両親、自身、息子の結婚時にも、その都度、新しい子孫桶が用意されたという。

このご夫婦によると、結婚の際に子孫桶のなかには、必ず縁起物としてナツメ、ピーナッツ、桂圓（ゲィユェン）（干し龍眼）、卵などをいっぱい入れ、「早生貴子（ザオシェングイズ）」「多子多福（ドゥオズドゥオフー）」「家庭円満（ジアティンユエンマン）」といった願いが込められていたそうである。

子孫桶も売られている結婚用品の専売店（中国 上海市、2013年）

オシドリ、カササギ、花模様

子孫桶は木製で、銅の箍（たが）がはめられた、高さ30センチメートルくらいの円柱状のおまるである。赤い漆が塗られ、蓋が付いている。おまるの表面にはよく花やオシドリ、カササギなどの縁起の良い模様が彫刻されている。オシドリは中国において「夫婦円満」「愛情」の象徴、カササギは「喜びを運ぶ鳥」とされ、吉兆や幸運の前触れとして親しまれている。この子孫桶には、当時彫刻された花模様がうっすらと残っている。

現在では、おまるは用をたす道具として使われることはなくなった。しかし、その装飾的・象徴的な意味合いは失われておらず、小型の工芸品として販売されている。現在、置物として作られたミニチュアの子孫桶は、重要な嫁入り道具として花嫁の実家から新婚夫婦の家へ運ばれ、寝室に縁起物として飾られる。

子孫桶（嫁入り道具）
標本番号｜H0274343
地域｜中国 上海市
展示場｜中国地域の文化

夫婦円満・子孫繁栄を願う嫁入り道具のミニチュア。
右が子孫桶（H0274344、中国地域の文化展示）

✦ 推しコレポイント ✦

蓋が「推し！」　花の彫刻と赤い漆がうっすら残っている。130年前に新婦の両親がこの桶に込めた祝福を思うと、胸が熱くなる。

イタリアの町では、パン屋に行こう！

宇田川 妙子（うだがわ たえこ）　民博 名誉教授

町ごとに異なるパンの味

みんぱくのヨーロッパ展示場には、彼らの主食たるパンのレプリカ展示がある。

わたしの調査地イタリアでは、今やスーパーでもパンを買えるが、町のパン屋を好む人が多い。値段はたしかに割高だ。しかしどの町にも、自前の焼き窯（薪（まき）を使う石窯も多い）をもつパン屋があり、焼き上がる午前中には客でごった返す。多くは昼食用のパンを求める女性たちだ。主婦だけでなく、働いている女性も職場を抜け出して買いに来る。昼過ぎにはしばしば売り切れてしまい、午後にはピザやビスケットを焼いて販売する店も少なくない。

わたしが調査していた、ローマからほど近くの町にあったパン屋も、そのひとつである。人気の秘密は、できたてが買えることに加え、その町で長く作られてきた伝統的なパンがあることだ。イタリアのパンは地域ごとに多種多様で、同じ地域のなかでさえ、町ごとに大きさや形、硬さなどが微妙に違う。人びとは自分が生まれ育った土地のパンの味を好み、誇りにしている。ときには他のパンを試したり、スーパーの廉価なパンを購入することもあるが、町のパンは特に日曜日の食事には欠かせない。

ヨーロッパ展示場の正面にあるパンの展示。左手のモニターには、ヨーロッパのパンの種類に関する説明や食事場面の紹介などとともに、イタリアの町のパン屋の写真もある（2025年）

レイカレイパの複製（フィンランド）

イタリアでは日曜日の昼食に、結婚や仕事で離れて暮らす子どもたちや、オジオバ、イトコなども含めたいわば大家族が集まる習慣がある。その食卓で皆で食べるのは、町の伝統的なパンなのである。

町の噂はパンの香り

パン屋は、町の人たちにとってはパンを買うだけの場所ではない。午前中の客たちの声を聞いていると、さまざまな情報交換や噂話（うわさばなし）が入り混じっていることに気づく。午後には少し暇になった店内にぶらりと立ち寄った人が、店主らとおしゃべりに興じている。また、パン作りが一段落した焼き窯を住民たちに貸すパン屋も少なくない。調査地のパン屋でも女性たちが自家製の菓子、ピザ、肉料理などをもちこんでいた。特に石窯で焼くと、家庭で作るのとは段違いの仕上がりになるが、彼女たちのもうひとつの楽しみは、焼き上がりを待つあいだのおしゃべりだ。

こうしてみるとパン屋は、町の重要なコミュニケーションや社交の場であるともいえる。実際、調査地のパン屋は、町一番の情報通だった。町のパン屋は、食だけでなく社会生活全般の要のひとつになっているからこそ、今も地域社会のなかに根づいているのである。

ローマ近郊の町のパン屋。午後なので、手前のショーケースにはピザなどがあり、奥の棚にまだ売れ残っているパンが置かれている（イタリア、2011年）

コッピアの複製（イタリア）

バウアーブロートの複製（ドイツ）

パコパンパ遺跡まで、残り40キロ

荘司 一歩（しょうじ かずほ）　山形大学 講師

深夜二時、ウアンボスという見知らぬ山村でバスを降りた大学生のわたしは、途方にくれていた。初めてのペルー旅行。最終目的地のパコパンパ村まではまだ四〇キロメートルも離れている。ここでバスを乗り換える予定だったのだが、着いてみるとそれは一週間に二本しか運行しておらず、次は三日後だ。パコパンパ遺跡を調査する関雄二先生（現民博館長）に「一人で来れるなら」と訪問の許可をもらった以上、なんとか自力で辿り着かなければならない。バスの乗客にお菓子を売りに来ていた少女が、親に頼んで家に泊めてくれるというのでひとまず野宿は免れた。翌朝、どうにかパコパンパへ向かう方法はないかと、オロオロと尋ねて回ると、見かねた村人が「俺が連れてってあげるよ」と声をかけてきた。親切すぎて怪しい、という疑念が少し頭をよぎったものの、他に方法はない。

「準備できたよ」と声をかけられて仰天した。てっきり車だと思っていたが、彼はオフロードバイクであらわれたのである。三時間以上、舗装されていない道を走るという。今さら彼の厚意を無下にすることもできず、「もう乗っちゃえ」といった心境だ。崖を沿うように伸びる山道を二人乗りで突き進み、サスペンションも効いているのかわからない乗り心地の悪さでわたしのお尻の感覚はとうにない。途中、休憩をはさみながら一緒に滝を見たり、彼の身の上の話を聞いたり、わたしのつたないスペイン語にも根気よく耳を傾けてくれた。

崖のような急斜面に沿って伸びる道と山中の滝

オフロードバイクに乗り込む筆者とウアンボスの村人
（写真はどちらもペルー カハマルカ州、2010年）

どうやら彼の友達がパコパンパにおり、ちょうど会いに行きたかったらしい。

すっかり打ち解けたわたしを村に送り届けた彼は颯爽と走り去って行った。村は年に一度のお祭りで活気に溢れている。じつはこれを味わうためにわたしは旅路を急いでいたのだ。

ペルーの人たちの温かさにほだされ、すっかり魅了されたわたしは、今もこの国で研究を続けている。日本で困っている観光客を見ては、彼を思い出し、声をかけることも増えた。彼のオフロードバイクは人やモノだけでなく、温かな気持ちもつないでいるのだと思う。

だって調査だもの

腸チフスとマラリアと過ごした年末年始

池邉 智基（いけべ ともき）　民博 助教

ギニア国境付近で調査をしていた際の筆者と調査協力者（セネガル ケドゥグ、2021年）

フィールドワーク中の病気

二〇一四年にセネガルで調査を始めたときから、お腹を壊すことも、原因不明の発熱も毎度のことである。蚊に刺されたところが膿（う）んだり、サソリに刺されたりしたこともある（幸い、足が痺（しび）れただけで済んだ）。そもそも、わたしは枕が変わるだけでうまく眠れない。とにかくフィールドワークにはケガや病気がつきものだが、幸運にも、病院に行くほどの事態はあまりなかった。

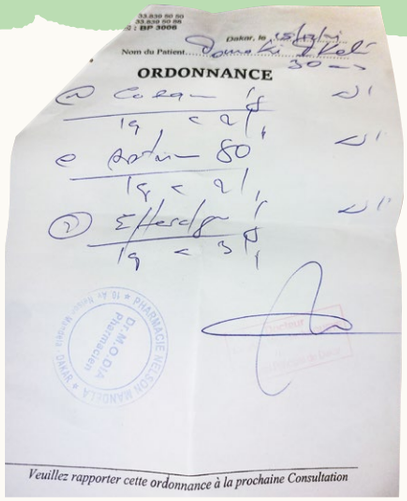
初めてセネガルの病院にかかったのは、二〇二一年末のことだった。ギニア国境近くの山間部で一週間ほどの調査を終え、首都ダカールに戻ってきた矢先の一二月二八日、今までに感じたこともないくらいの無茶苦茶な寒気と頭痛に襲われた。起きあがるのもやっとという状態だったが、次の日調査助手に連れられて診療所に向かった。すぐに受けたマラリア検査は陰性だったが、「この検査キットはアフリカ人用だから、アジア人だと結果がちがうかも」と言われた。検査キットにそんなちがいはないはずだが、釈然としないまま、勧められた病院へと向かった。

四〇度超えで年越し

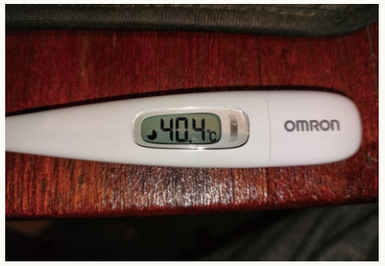
病院で何時間も待たされた挙げ句、「血液検査をしないとわからない」と言われた。しかし、わたしの血圧が低いため採血できない。そのため、翌朝に朝食をとってから病院に来るよう指示された。その場で、抗生物質と解熱剤、そして抗マラリア薬が処方された。マラリア検査では陰性だったのにと思いながらも、大人しく薬を飲んで寝た。

翌日、吐き気をこらえてバナナを食べ、ようやく採血ができた。だが結果が出るのは四日後だという。どうにでもなれと思いながら帰宅し、熱を測ったところ、四〇・四度。人生で初めてみる数値に呆然（ぼうぜん）としつつ横になり、気づくと二〇二二年になっていた。無茶苦茶な年越しだった。

一月三日、検査結果を受け取りに病院に行くと、看護師が笑いながら「腸チフスとマラリアの両方だったよ！」と告げた。笑えるような結果なのかわからなかったが、医師の説明では山間部の調査で腸チフスに感染し、その発症にともなってマラリアも併発したようだ。処方された抗マラリア薬は結果的に的中していた。



処方箋。何が書いてあるのかまったく読みとれない（セネガル ダカール、2021年）



人生で初めてみた数値（セネガル ダカール、2022年）

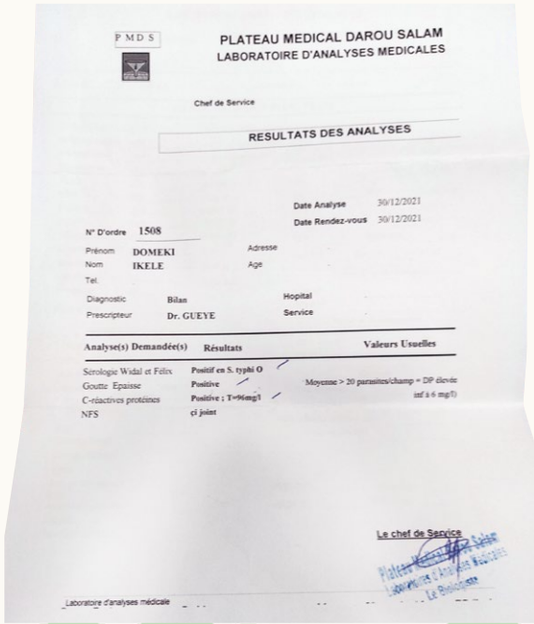
抗マラリア薬。○印は朝晩に1錠ずつ飲むようにという意味（セネガル ダカール、2021年）

解熱剤。○印は朝昼晩に2錠ずつ飲むようにという意味（セネガル ダカール、2021年）

薬の副作用で遅れる回復、そして領収書の問題

その後も薬を飲みつづけているうちに熱は下がったが、体力の回復には二週間以上かかった。後日、セネガル在住の日本人医療関係者に事の顛末（てんまつ）を話したところ、そもそも効力が強すぎる薬を、倍以上の用量で飲まされていたことが判明した。薬をとにかく飲ませて治療するというのがセネガルの公立病院ではよくある治療法のようだ。腸チフスとマラリア、そして薬の副作用も相まって一カ月近くわたしの体力は落ちたままであったが、とりあえずはセネガルの医療事情を理解できたということにして納得した。

体調が戻ってきたころ、海外旅行保険の申請のために検査結果と領収書を改めて確認したところ、わたしの名前が「ドメキ・イケレ（DOMEKI IKELE）」になっていた。検査時に疲れ切っていたからか、わたしの名前がうまく聞き取ってもらえなかったようだ。幸いにも出費は思ったほど大きくなかったが、これでは保険の申請はできないだろうと苦笑いをするしかなかった。


PLATEAU MEDICAL DAROU SALAM
LABORATOIRE D'ANALYSES MEDICALES
Chef de Service
RESULTATS DES ANALYSES
Date Analyse 30/12/2021
Date Rendez-vous 30/12/2021
N° D'ordre 1508
Prénom DOMEKI
Nom IKELE
Tel.
Adresse
Age
Diagnostic
Prescripteur Dr. GUEYE
Bilan
Hopital
Service

Analyse(s) Demandée(s)	Résultats	Valeurs Usuelles
Sérologie Widal et Félix	Positif en S. typhi O	
Goutte Epaisse	Positive	Moyenne > 20 parasites/champ = DP élevée
C-réactives protéines	Positive ; T=96mg/l	inf à 6 mg/l)
NFS	ci joint	

Le chef de Service
Laboratoire d'analyses médicale

「DOMEKI IKELE」と書いてある検査結果（セネガル ダカール、2022年）

「食事は1日1回、夜だけだね」

風戸（かざと） 真理（まり）　北星学園大学 准教授

モンゴル国の牧民はウシ・ウマ・ヒツジ・ヤギ・ラクダを飼育し、草原にポツンと移動式天幕ゲルを立てて核家族で遊牧生活をしている。わたしは牧民の移動と情報活用に関する調査をおこなっているが、2025年3月に訪ねたザブハン県テルメン郡の牧民に「食事って1日何回する？」と聞いてみると、「1回。あ、時間があれば昼にも食べるけど、まぁ忙しいから1日1回、夜だけだね」と口をそろえた。

とはいえ、彼らは大のもてなし好きである。遠来の客があれば仕事を中断してご馳走（ちそう）と酒で歓待する。わたしがゲルを訪ねた1日目はこんな具合だ。

まず、儀礼的な食べ物として、常時作り置きして盛ってあるボルツクなどの小麦粉揚げ物やアーロールなどの乾燥した乳製品の盛られた器を差し出され、いずれかひとつを少量口にいれる。続いて、乳茶（にゅうちゃ）という、ブロック状の茶を砕いて水で煮て、塩とミルクを加えたスープのような熱い飲み物をいただく。

次に、甘いホワイトソースか甘いごはんのいずれかの温スイーツを目の前で作ってくれる。

その後、肉うどんなどの肉入り料理による食事に移り、最後に、自家製の乳蒸留酒や市販のモンゴルウォッカでもてなしてくれる。

ホスト自らが生産した肉とミルクが用いられた、ナチュラルでリッチな飲料・甘味・食事には心身ともに満たされる。ただし、このような初日の饗応（きょうおう）はあくまで「ハレ」の場である。人類学者は現地の生活を長期間体験する参与観察をおこなうのであるが、滞在2〜3日目から「まぁ忙しいから1日1回、夜だけだね」の日常生活に突入するのである。

忙しい時期には夜の食事は23時ころになる。そのメニューは、肉うどんがもっとも頻度が高いが、茹（ゆ）で肉だけ！という日もある。春は次々と生まれてくる仔畜（こちく）の世話で忙しく、夏はミルク加工のために調理用ストーブがふさがり、食事の準備は後回しになる。このため、起床から23時ころまでは、上述した作り置きの乾き物を、熱い乳茶に入れてふやかして何度も食べる。なんとも味気なく、お腹がすくが……幸運にも次の客が来ると、人びとは仕事を中断して歓待モードに入る。するとわたしもお相伴に預かって「昼にも食べる」ことができるのである。

上：時計回りに、小麦粉を水で練って型押しした揚げ物と乾燥した乳製品（四角い皿）、甘いホワイトソース、乳茶
左下：肉うどんは1番人気の食事メニュー
右下：小麦粉揚げ物を熱い乳茶に入れてふやかす
（写真はすべてモンゴル国 ザブハン県、2025年3月）

月刊みんぱく 2025年 12月号

第49巻第12号通巻第579号　2025年12月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　山中由里子
編集委員　樫永真佐夫（編集長）　河西瑛里子
黒田賢治　中川理　奈良雅史　松本雄一
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　株式会社 研文社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C028818 www.fsc.org

VEGETABLE OIL INK

GREEN PRINTING JFPI P-B10271

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9:00〜17:00）

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

今月号の地図

編集後記

芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）に『手巾（ハンケチ）』という小説がある。息子の死を報告に来た女の口ぶりがまるでふだんの会話みたいであり、口元に微笑さえ浮かべている。そのことを怪訝（けげん）に感じ始めた男の目に、たまたま映ったのがテーブルの下で女がかたく握りしめていたハンカチ。激しい悲しみに震え、引き裂かれんばかりであった。進駐軍の米兵たちも息子の戦死を日本人が笑みさえ浮かべて語る不思議を多く伝えた。笑顔の多義性については津村文彦さんが仏教国タイの例で語っているが、森鷗外（もりおうがい）の『寒山拾得（かんざんじっとく）』を思い出しても禅で笑いは大きなテーマにちがいない。藤田一照さんの「巻頭エッセイ」から、笑いは人間にとって根源的な身体作用である気がした。

本号で笑いを扱ったのは、強者の圧倒的な力に弱者が沈黙させられる時代の空気を感じ、笑いの力について想像をめぐらせていたからだ。そのうち、いつしか「笑ハラ」に思い至っていた。（樫永真佐夫）

次号の予告 1月号

特集「米――つくる・はこぶ・たべる」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151

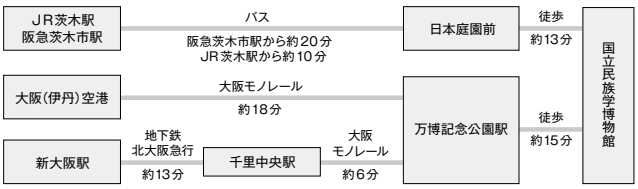
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）

休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

観 覧 料　一般 780円／大学生 340円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館友の会機関誌『季刊民族学』のご案内

表紙：大正2年のブラジル移民船「若狭丸」
（出典：永田稠『南米日本人写真帖』日本力行会、1921年）

A4判・104頁　2025年10月31日刊行

最新号

『季刊民族学』194号
ISBN 978-4-915606-97-7

海と河川をめぐる グローバルヒストリー
——人・ものの往来と文化創発

四周を海に囲まれた日本列島の人びとは、近代以降、汽船によって地球規模で移動するようになった。日本と世界各地とのあいだを船で行き来した人・ものの物語を通して、海と河川をめぐるグローバルヒストリーを解き明かす。

根川 幸男／志賀 祐紀／ファン・ハイ・リン
入山 洋子／西野 亮太／飯窪 秀樹
ファクンド・ガラシーノ／酒井 佑輔／橋本 順光

連載 フィールドワーカーの布語り、モノがたり
最終回 スラウェシ島トラジャ地域における機織りの復興　日下部 啓子
ほか

193号　ISBN 978-4-915606-96-0
［特集］**南方戦線の戦後誌**——人びとの経験の多様性から

192号　ISBN 978-4-915606-95-3
ダースレイダー［責任編集］
［特集］**ヒップホップ**——逆転の哲学

191号　ISBN 978-4-915606-94-6
［特集］**大阪**——野生の都市

好評発売中

『季刊民族学』170号
ISBN 978-4-915606-98-4
［特集］**小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の怪異探究**

文化の混ざりあいや生者と死者の交わりに心惹かれ、混淆する声、異界からの声に耳をすます。小泉八雲の怪異探究の到達点とは何であったか。

小泉 凡／真鍋 晶子／今福 龍太
中川 智視／平川 祐弘／ペトル・ホリー
中島 淑恵／香川 雅信／堤 邦彦
広瀬 浩二郎　ほか

講読方法

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。
おためし購入は一般価格：2,750円（税込）、会員価格：2,200円（税込）。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください（会員は不要）。
『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
https://www.senri-f.or.jp/shop/
オンラインショップ

国立民族学博物館友の会（公益財団法人 千里文化財団）
電話 06-6877-8893（平日9:00～17:00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp
友の会